

◇◆慶應義塾大学大学院経営管理研究科(ビジネススクール)  
「実践的授業方法について考える」ニュースレター(第15号・2008/3/31)◆◇

ニュースレターの第15号をお送りします。今月は、東京国際大学大学院で臨床心理士養成教育における実践的授業に積極的に取り組まれている、溝口純二先生の第2回をお送りします。

\*\*\*コンテンツ\*\*\*

本号のお知らせ  
(イベント情報などをご案内します)

実践的授業法取組紹介  
(実践教育に鋭意取り組まれている先生方の手記を掲載しています)

ショートエッセー  
(実践的授業方法に関するエッセーを掲載しています)

■□本号のお知らせ.....

慶應義塾大学ビジネススクールのホームページからニュースレターのバックナンバーがご覧いただけます。  
こちらからどうぞ。

↓

[http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/gp\\_news.html](http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/gp_news.html)

.....

平成20年度の「ケースメソッド教授法」は、下記の日程で開講するべく現在準備中です。(日程が変更される可能性もあります)

9月27日(土)、10月11日(土)、10月25日(土)、11月15日(土)、11月22日(土)計5回

場 所: 慶應義塾大学大学院経営管理研究科(日吉)

時 間: 各回とも10時30分～17時まで

.....□■□

□■□実践的授業法取組紹介.....

実践的授業法取組紹介

このコーナーでは、大学教員による実践的授業方法への先存取組を「私の履歴書」風に紹介してまいります。今月は、東京国際大学大学院で臨床心理士養成教育における実践的授業に積極的に取り組まれている、溝口純二先生の第2回です。

【第2回】

臨床心理士養成の実践教育について

東京国際大学大学院  
臨床心理学研究科  
教授 溝口純二先生

前回は、東京国際大学大学院臨床心理学研究科のあらましや、臨床心理士という資格の特性を紹介しました。今回は、本学で行っている実践教育の具体例を紹介します。

臨床心理士は、種々の臨床心理査定技法や面接技法に精通していなければなりません。各種の心理検査を行ったり、生育歴やこれまでの経過などを聴くことによってクライアントを理解し見立てていきます。その見立ての結果から適切な援助の方向性を判断していくわけです。

本学では心理査定の授業で、2年間のうちの1年半をかけて「ロールシャッハ・テスト」という心理査定技法を教えます。そんなに時間をかけるのは、卒後のことを考えているからです。就職先にもよりますが、病院やクリニックに勤めるのであれば、現場で要請される仕事の第一が心理査定です。なかでもロールシャッハ・テストはよく使われる技法で、医学であれば血圧検査や血液検査などに該当します。しかもこの技法は自分だけでは勉強できないので、授業の中で学んでいくしかないのです。もっとも、授業で教えられるのはまったくの基礎です。習熟するためには、経験と研鑽が必要です。一人前になるには10年以上かかります。

上述したように、クライアントに関する見立てを行った後、臨床心理士は必要に応じてクライアントの援助を行っていくことになります。援助には心理療法・カウンセリングといわれる専門技法を用います。

心理療法を実践的に教育する方法として、私は授業に「ロールプレイ」を取り入れていました。ロールプレイの方法は教える先生によって違いがあると思いますが、私の場合は次のようなやり方です。まず、20名ほどの受講生のうち、そのときのカウンセラー役2名とクライアント役2名を決めます。残りの学生は観客という重要な役になります。そしてクライアント役の2人だけを別室に呼び、例えば「あなたは不登校の中学2年生の女子」「あなたは付き添ってきたお母さん」といったごくわずかな情報を与えます。教室は椅子などを配置して面接室として設定しておきます。そしてカウンセラー役の2人が座っています。私が教室に戻った後、クライアント役の2人が教室に入ってきて、面接が始まります。つまりクライアントと呼ばれる相談者が最初に相談に来る場面になっているのです。クライアント役の2人は私が与えた情報をすぐに話し終えてしまいます。私がわずかな情報しか与えていないからです。そのためカウンセラー役の2人の質問への答えが情報に含まれていない場合、クライアント役は自分で考えなければなりません。そこに自ずと意識しない自分が表出することがあります。タイミングを見て、私がストップをかけます。10～15分程でしょうか。そしてまずクライアント役とカウンセラー役に感想を訊

きます。次いで観客も含めて皆で意見を出し合い、最後に私が解説をします。なかには、会うなり「何グラムで産まれましたか」「母乳でしたか」ということをお母さん役に訊いたりするカウンセラー役の人もいます。生い立ちから全部聞かないと子どものことが理解できないと思い込んでいるわけです。ところが不登校生役の人に聞いてみると、「自分のことを何も訊かれない」という感想が出ます。ロールプレイで様々な立場を疑似体験することで、相手の気持ちが少しでも分かればいいのです。カウンセラーという仕事がどのようなものか、その難しさと面白さが感じられれば良しとします。もちろん、観客としてやりとりを見ることも重要な学習です。現在は時間の都合上、この授業は開講していませんが、機会があれば再開したいと思っています。

「事例(ケース)研究」という授業では、臨床心理学関連の論文として掲載されている事例について取り上げます。クライアントの病歴や逐語に近い形の発言など、カウンセリングの経緯を克明に記録したものを「事例」と呼びます。自分達がカウンセラーという立場だったら、どのような見立てをしたり援助をしていくかについて、グループで話し合って発表をしていきます。そして、教員のほうから解説を加えていくわけです。そのなかで、学生は自分達のクライアントへのかかわりの特徴や癖について気づいていくことができます。自分の特徴を知っていくことは、カウンセラーになるための訓練になるわけです。

修士2年になると、より実践に近い「実習」があります。学内での実習として、大学院内に設置されている臨床心理センターで全員が必ずクライアントを担当します。学外での実習もあります。病院やクリニック、教育現場、福祉現場等で経験を積んでいきます。

また、実践教育のフォローアップとして「スーパーヴィジョン」があります。修士2年となって初めてもつクライアントへの対応や面接でのやりとりについて、ゼミの指導教授から具体的かつきめ細かい指導(スーパーヴィジョン)を受けるのです。ゼミのその他のメンバーも交えて行う場合は、「グループ・スーパーヴィジョン」と呼ばれています。自分が担当しているクライアントのケースについて発表し、指導者やメンバーからコメントをもらうという授業の形式です。この「スーパーヴィジョン」のシステムは、修了後も続けていくことが、臨床心理士として成長していくために必要な訓練であるとされています。

臨床心理士資格試験に向けて膨大な知識・理論も一方で重要ですが、それは一人でも学べます。より重要なのは、現場に出て役立つ能力を身につけることではないでしょうか。だからこそ、本学では実践教育を何よりも重視しているのです。

..... □ ■ □

□ ■ □ 実践的授業方法ショートエッセー.....

このコーナーでは、ケースメソッド教育をはじめとする実践的授業方法に関するショートエッセーを、毎月少しずつお届けしています。

## 第14回

### 実践教育における「選択と集中」

その道で一人前になるのに少なくとも10年を要する専門性の高い職業を選び、一人前と認められる日に向けて、第一歩を踏み出そうとしている人がいる。その人が修養の最初の2年を大学院で学ぶとき、そこで教える教師は、何を考慮に入れ、どのように教え、その人を送り出すのがよいか。上述のような教育が求められる場面で、実践教育の現場がベストを尽くすための考え方や基本姿勢について、今回は議論してみたい。

前号で紹介したように、大学院における臨床心理士教育の枠組みは、臨床心理士資格試験への合格を支援するべく作られている。この枠組みのもとでは、学習者の意識下にはまず資格試験への合格があり、試験合格率は大学院の評価にも直結するから、資格試験を視野に入れない教育は成立し得ない。しかし、合格率が高い水準に達した学校ならば、教育のターゲットを「合格したその先」にも置くことができる。東京国際大学の、とりわけ溝口先生の考え方は明らかにそうだと感じた。

溝口先生の頭の中にあるであろう、修士課程2年間で行われる臨床心理士教育の基本要件を、筆者なりに書き出すと次のようになる。1) 理論を講義して教えても臨床心理士の仕事はできないだろうが、入学者の基礎知識は絶対的に不足しているので、座学時間を減らすこともできず、理論知識の詰め込みもやらざるを得ない。2) 1種指定校としての役割を果たすべく、臨床心理士の職業現場を授業の中に少しでも多く再現して、実践教育の場を作ることが必然である。3) 研究スキルや学習能力そのものを高めるために、修士論文研究も重視したい。4) これらすべてを2年間でやる。かつ、資格試験に合格する実力が備わっているようにする。

この要件が求める学習内容は大量で広範に及ぶが、物理的に許された時間は2年間で、各教員が担当する授業コマ数はさらに限定的である。ここで溝口先生が出した答えは「選択と集中」であり、上記の2)に関して言えば、ロールシャッハ・テストへのフォーカスである。筆者らがインタビューに伺った際も、溝口先生が「ロールシャッハ」という言葉を連呼し、「ここまでやるか、というくらい、とことんやる」と力説されていた姿が今でも印象に残っている。

ここからは溝口先生が「なぜひとつのことに集中するのか」という問いへの、筆者なりの考察を綴ってみたい。

溝口先生は、「ロールシャッハ・テストにフォーカスする分、他の心理検査を扱えなくなることは百も承知」でこれを選択したはずだ。きっと様々な理由があつてのことで、文中で紹介されたロールプレイング授業は今も行われていないようだが、それでもロールシャッハ・テストに費やす1年半は健在なのである。

少々カバレッジが狭くなったとしても、臨床心理士の仕事の難しさ、奥深さ、そしておもしろさを学生に伝え、課程修了後も、そして試験合格後も学び続けることの動機と原動力を学生に与えるための道具として、溝口先生はロールシャッハ・テストを選び、それに託したのではないか。またさらに推測すると、このテストの中には臨床心理士の仕事のエッセンスがたくさん詰まっていて、溝口先生が捉えているこの心理査定技法の活用場面は、臨床心理士の仕事の縮図なのかもしれない。

だとすれば、溝口先生の教育アプローチは、教育内容のバリエーションを充実させることで実践に備えるのではなく、単一技法の活用場면을教室に実践しながらの高密度で繰り返し再現することで、学生の学習能力そのものを鍛えて実践場面に備えようとするものだと言える。これは実務現場での実践場면을強く意識した教員ならではの発想である。

先月の議論に戻るが、実践場面での状況個別性が高く、それゆえに学習対象領域も広範に及ぶ臨床心理士教育では、「必要なものをひと通り浅く広く」ではなく、「何かひとつ、必要にして十分なレベルに近づけておく」こ

とで、そこから横方向への展開を期待する教育の方が、より実践的であり、教育効果がより長続きするのではないか。これが筆者の今月の発見である。

東京国際大学の卒業生の試験合格率が高く、臨床心理士としての職務能力評価が高いことの一側面を、筆者は溝口先生のエッセイを通して垣間見た。また、何よりも、溝口先生自身が抱えている臨床心理士という仕事への深い愛情、そしてその職を目指して真摯に努力する学生たちへの惜しみない愛情を感じた。

先週に卒業式を迎えた実践大学院も多いが、卒業の翌日からの舞台となる実務の現場で、卒業生たちは課程在籍中に学んだ何をどう生かして、社会の役に立っていくのだろうか。この時期、教師たちの関心はひとまず新入生に移りがちだが、卒業生たちの新年度にも思いを馳せながら、実践に臨む彼ら彼女らに十分なことができたのかどうか、静かに自問する時間も作りたい。

（文章 竹内伸一）

..... □ ■ □

このメールマガジンは毎月1回発信しております。

~~~~~

○お問い合わせ先

慶應義塾大学大学院経営管理研究科  
ケースメソッド授業法研究普及室（高木晴夫研究室内）  
kbsnewsletter@info.keio.ac.jp

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/>

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 文科省特色GP事業ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/index.html>

~~~~~

発行者 高木晴夫

編集者 竹内伸一、住吉みどり

次号（第16号）は2008/4/30にお届けする予定です。

ご意見、ご感想、購読者のご紹介は [kbsnewsletter@info.keio.ac.jp](mailto:kbsnewsletter@info.keio.ac.jp) 宛に、また、メール送信先の変更を希望される方、購読を希望されない方、購読を中止したい方は、お手数ですが [kbsnewsletter@info.keio.ac.jp](mailto:kbsnewsletter@info.keio.ac.jp) までご一報ください。次号発信日の前日までのご連絡に対応させていただきます。

当メールマガジンの内容を転載する場合は、ご一報ください。